

# 「加賀のスーパーテレインを走りたい」(実行委員長報告)

実行委員長 木村佳司

2001年11月23日、私は石川県加賀市の上木キャンプ場に居ました。そこに続々と沢山の人々が詰めかけてきては、手に手に小さなサンプル地図を持って松原の中に消えてゆきます。そう、日本学生オリエンテーリング選手権ショートディスタンス競技大会、通称インカレショートを翌日に控え、そのモデルイベントが上木キャンプ場を会場として行われているのです。

真剣な顔をして地図を見る者、周囲を見渡して地図と現地をしっかりと確認する者、楽しそうに松原を巡る者、グループ内でルールを決めてタイムアタックをする者、後輩を引き連れて地図読みやルートプランのレクチャーをする者など、明日の舞台を控えて思い思いのスタイルで加賀海岸の松原を楽しんでいました。

このモデルイベントに参加してくれた470名の人たちを目の前にした時、インカレショート加賀大会が本当に実現したんだなという実感が湧いてきました。

話は20年ほど前の1982年に遡ります。島根県出雲市で島根大学オリエンテーリングクラブの合宿が行われました。この合宿に山口大学オリエンテーリングクラブに当時在籍していた私を含む数名が乱入してしまったことが、今回の発端だったのかも知れません。その時の合宿では浜山運動公園のテレインを使用しました。地図こそ3色刷の、当時としてもちょっと旧式の地図でしたが、テレインの通行可能度は素晴らしく、黒松の生えた砂丘を嬉々として走りまわると自分たちがいました。山口や広島など瀬戸内地方の灌木ばかりのテレインを走っていた当時の私にとって、砂丘はとて新鮮でした。「もっと楽しくオリエンテーリングをするために自分達で本格的な0-mapを作ってしまう。」浜山砂丘に魅了された私と当時の中国学連のメンバーは、自分たちの合宿用に、浜山に本格的な0-mapを作成してしまいます。学生時代のこんな体験が今回のインカレショート加賀を企画する原点となっています。

月日は流れ、大学を卒業し、就職で長野県に住むようになりました。

1988年4月2日。今回のテレイン

と同じ加賀市で行われた第6回金沢大学大会に参加するために、前日より信州大学の学生たちと一緒に加賀市に来ました。その時の宿は加賀市青年の家。お金の無い貧乏学生がどこから情報を手に入れたのか知りませんが、一泊400円の宿を探してきたのです。学生たちと同じ車に乗って早めに宿舎に着いたので、周囲をランニングすることにしました。どこまでも続く通行可能度の高い松原。緩やかに波打つ地形。そこには日本では珍しい、そしてオリエンテーリングに適した場所があったのです。そう、この加賀市青年の家は、今回のテレインの中にありました。「ここをナビゲーションしたらどんなに楽しいだろう。」これが私と加賀海岸の出会いでした。

翌日の金沢大学大会は、同じ加賀市でも北陸本線を越えた南側で開催されました。「城山官山」と名付けられた地図ですが、結構な傾斜で苦戦しました。大会を主催した金沢大学のメンバーに「加賀の海岸はオリエンテーリング適地だけど、あちらで大会をやる企画はないの?」と聞くと、「加賀海岸は国有林なので利用が難しいんですよ。」という答えが返ってきました。「そうか、仕方がないんだな。」しかし私の頭から加賀のテレインへの思いが消えることはありませんでした。

私とこのテレインを引き合わせてくれた0-map「城山官山」を改めて眺めてみると、13年前当時の地図調査者の名前が掲載されています。その中の何人かは今回のインカレショート加賀の運営も行ってくれました。

(この時に宿泊した加賀市青年の家は老朽化に伴って現在は廃止となっています。当時の建物は今でも残っています。)

それから11年が過ぎた1999年。インカレショートの候補地として北陸地区の声があがりました。この時、真っ先に頭に浮かんだのがここ加賀海岸。しかし加賀海岸はオリエンテーリングでは使用できないという情報を何度か聞いていました。そこで本当に加賀海岸がオリエンテーリングで使用できないのか、調査をしました。

当時加賀海岸が利用できないと言われた理由としては以下の4点がありました。

(1) 国有林はオリエンテーリングの利用許可が降りないのではないか。

(2) その地域には希少植物があるらしい。

(3) ラムサール条約地になっているのではないか。

(4) 地形が難しく調査できない。もっとも4番目については、何とか乗りきる自信はありましたので、問題は上の3点のみでした。

(1)の国有林についての利用許可について

0-map「城山官山」が作成された時代には、全国の国有林においてオリエンテーリングの利用許可がなかなか出にくい状態でした。しかし時代は変わってゆきます。平成に入って、オリエンテーリング目的での国有林の利用が認められたケースが何点ありました。行政も少しずつ変化しているはずですが、そこで地元石川県オリエンテーリング協会を窓口にして国有林の入林許可を取れるかどうかから調査から始めました。「案ずるより産むが安し。」思っていたよりすんなりと利用許可をいただくことができました。これも石川県協会のおかげだと思います。

(2)の希少植物について

こちら石川県オリエンテーリング協会にお願いして、希少植物が生えていると言われている場所を調査していただきました。その結果、確かにこの付近には希少植物の生えている地域はありますが、オリエンテーリングでは決して使用しない場所であることが判りました。海岸には海浜植物が多数生えていますが、こうした地域は今回の地図に含まないようにしています。

(3)のラムサール条約地について

テレイン周辺の鴨池は確かにラムサール条約地で、自然環境を保護する必要があります。ラムサール条約地の範囲がどの程度なのか心配しましたが、競技エリアと離れており、問題がないことが判りました。

これらの問題をクリアした1999年11月、ちょうどインカレショート加賀大会の2年前に、第0次調査とも

言うべき下見を行ない、あらためてテレインを子細に見てまわりました。ここで実行委員会はいきなり頭を抱えてしまったのでした。「ここで本当にオリエンテーリングの地図を作成することができるだろうか?」波のようにうねる地形、細く長く伸びた尾根、交差する尾根。今までに見たことの無い地形。「まるでベルギーワッフルのような地形だな。」こうして下見を行った者の中で、この加賀海岸の特殊地形のことを「ワッフル」と呼ぶようになりました。

さてこれを 0-map の記号でどう表記すれば良いのか? ある程度能力のある人なら地図調査すること自体は可能でしょう。しかし、調査者間での表現のバラつきが、ものすごく大きくなることは想像に難くありません。さらにせっかく出来あがった地図においても、地形の表現方法が必ずしも競技者に最適だということはいえないかもしれないわけです。最初の難関をクリアしたものの、早くもインカレショート加賀大会は第二の難関に差し掛かってきました。

「調査のプロを使おう。オリエンテーリングの本場、スウェーデンのプロマッパーならきっと満足できる表現方法を示してくれるはずだ。地図の表現方法について、たとえ異論が競技者からあるだろうが、プロマッパーの表現であると言えばある程度の抑えは効くはずだ。」

2000 年 4 月。スウェーデンのプロマッパー、ペローラを加賀のテレイン調査に投入したのはこうした意図の元ででした。ペローラは短期間のうちにほぼ全域に足を運び、このテレインの骨格とも言える調査をしてくれました。この地図表記によってテレインの地形表記のガイドラインが示され、地図化に向けて大きく動き始めました。

ペローラが地図を調査する時の話です。日本海の海岸は密入国が多いエリアと言われています。そんな場所をしかも林の中を外国人がさまよっていたら警察に通報される可能性が無いとも言いきれません。そこでペローラを調査に投入する前に、地元の大聖寺警察に本人同伴で挨拶にゆき、森林管理事務署の入林許可書をしっかりと持たせて調査を行っていただきました。これは加賀海岸ならではの話と言えます。

その後、国内プロマッパーである山川氏に 2 次調査をお願いし、細かな修正や日本国内の 0-map の現状と大

きく乖離しないようなローカライズなども行われました。こうして心配された地図化はほぼ満足のいく出来となりました。山川氏に言わせれば時間不足で十分にマッピングコントロールできなかった部分があるという事ですが、最初にワッフル地形を見た時の衝撃から考えると、2 人のプロは、まずは十分に役割を果たしてくれたと言えます。

いくら素晴らしい地図を作ろうと、いくら素晴らしいコースを作ろうと、どんなに地元交渉が大変でも、参加者が集まらなくては、大会として成功したとは言えません。日本学連の加盟員の多くが大都市、特に東京に集中しているという現実を見ると、石川は東京から距離が遠く、参加者が少ないのではないかという不安がありました。主催者である学生はある程度参加してくれるとしても、財政を支えてくれる一般参加者の出足も気になるところです。

ちょうど同じ 2001 年に JOA (日本オリエンテーリング協会) 主催の東日本大会が隣の福井県で行われると聞き、これは手を結んで連携したイベントにしなければならぬと感じました。例えば、2 週間間隔でインカレショートと東日本大会を開催したとすると、参加者がそんな短期間のうちに 2 回も北陸まで足を運んでくれるとは思えないですから、どうしても参加する大会を一つに絞ってしまうでしょう。そうなるお互いに参加者が少なくなり、お互いが財政難に陥ってしまいます。

そこで、今度は石川県オリエンテーリング協会だけではなく、福井県オリエンテーリング協会とも協力をして、インカレショート加賀大会と東日本大会とで見かけ上の多日間大会を構成してしまおうというアイデアを思いつきました。しかしながらこれを企画した時は JOA の主催事業と学連の主催事業のマルチイベントというのは前例が無く、どれだけ協力が得られるのか未知数でした。

幸いなことに、北信越地区には連絡協議会があり、連携を取り合う土壤ができていました。私も長野県協会の代表として北信越クラブ連絡協議会に参加させていただいていました。

こうした東日本大会とインカレショートのマルチイベントを推進した理由としては、オリエンテーリング競技者が減少傾向にあり、どのイベントも参加者が思ったほど集ま

らないという事実が 1999 年あたりから顕著になってきているという危機感でした。福井県協会もこのことに理解を示し、最終的には私たちインカレショート実行委員会側の示した日程案で東日本大会の日程を計画することを約束してくれました。

このマルチイベント化はかなりの成果を見ました。この北陸にあってインカレショート事前エントリー者数がチームオフィシャルを含めて 900 名を越えたのは上出来と言えるでしょう。

また東日本大会の事前エントリー者数は 685 名だったそうですが、これは同県が 8 年前に東日本大会を開催したときの、事前エントリー数を上回る数字となりました。今年、首都圏日帰り圏内で開催された公認大会よりも事前エントリー者が多く、この時代としては画期的な数字といえるのではないのでしょうか。

学生はどうしてもオリエンテーリングが大学のクラブ活動の範疇に終了しがちなものですが、もう少し広く一般競技会にも参加してもらいたいと私は思っていましたし、今でもそう思っています。また社会人オリエンテーリング愛好家にも学生たちの熱く戦う姿を見てもらいたい。日本学連の活動を少しでも多くの方に知っていただきたいと思っています。このインカレショートと東日本大会とのマルチイベント化にはこうした個人的な思いも入っていました。

そして 2001 年には福井の東日本大会とは別にもう一つ、インカレショートにとって大きく関係するイベントが行われました。それは 8 月に開催された秋田ワールドゲームズです。ワールドゲームズは秋田の飯島砂防林で開催され、加賀海岸と比較的類似のテレインといわれています。ワールドゲームズを 2 ヶ月後に控えた 2001 年 6 月、ワールドゲームズ日本代表選手を招いて加賀海岸で試走を行いました。代表選手にとってはワールドゲームズに向けてのトレーニングになったと思います。またインカレショート実行委員会にとっても、ワールドゲームズ選手から見た地図の表現方法やコースプランニングに対するフィードバックが行われました。これを機会にワールドゲームズ代表選手はそのままインカレショートの実行委員としても大会成功の為に尽力してくれることとなります。

全体としての設計図を描いてそれ

を軌道に乗せてしまった後の私は、実行委員長というより広報担当者として動いていたような気がします。私の関与するインターネットサイトである orienteering.com や 私も参加しているオリエンテーリングマガジンを活用して広報をしてゆきました。また併設大会へのエントリーでは日本学連主催大会で初めて、クレジットカードによる決済を導入したりと、新しい試みも行いました。

問題は徐々に解決され、実行委員会の歯車はインカレショート加賀に向けて回り始めました。試走・調査を何度も繰り返してコースも徐々に練られてきました。インカレショートの骨格については私が設計して行きましたが、さすがに現地ですぐに直接指揮を取ることがなかなか出来ません。しかし、幸いにも今回は非常に優秀な実行委員に恵まれて運営準備は進んでゆきました。今回は地元の石川県で実質的に指揮をとってくれた小

林力くんをはじめ、多くの実行委員の皆さんに感謝しています。

大会5日前から金沢入りして、地味な作業を重ねるうちに徐々にインカレショートが迫ってきました。最初の構想から13年、いよいよ憧れの加賀海岸のテレインを900名のランナーが走る日が近づいてきたのです。何度も見た夢が現実になるのです。実行委員会メンバーも続々加賀に集まりました。天気予報は降水確率0%。心配することは何もありません。ココロおきなく学生たちに、それぞれの意気込みをテレインにぶつけ、競い、喜び、笑い、泣いてもらう準備が整いました。

私は現在、加賀市までは車で5時間かかる信州松本に住んでいます。自宅から遠い加賀の地でなぜ私がインカレショート直接企画したのか？それはこの加賀海岸のテレインが私を魅了して止まなかったからです。

このインカレショート加賀大会は、幻のスーパーテレインを走りたい一心の木村と、城山官山での金沢大学大会を実行した金沢大学の旧世代OB、金沢大学の新世代OB、森林管理事務署との交渉にあたってくれた石川県オリエンテーリング協会、そしてインカレショート成功の為に動いてくれた日本学連のOB、さらにワールドゲームズの日本代表選手たちによって作り上げることができました。

そしてその情熱を受けとめ、各種施設を提供して下さった地元加賀市、会場となった緑丘小学校の皆様、そして何と云っても貴重な国有林の利用を許可下さった石川県森林管理事務署の皆様には深く感謝したいと思います。

## 運営責任者報告

小林 力

北陸の11月下旬にもかかわらず、晴天に恵まれ、たくさんの方のご参加、ご協力をいただき、大会を無事終了することができました。この場を借りてお礼申し上げます。運営関係について、いくつか報告します。

### 【大会コンセプト】

今大会では、

- (1) テレインが、今まで経験したことのない防砂林である
- (2) 30人ぐらいの実行委員で少経費でショートインカレを運営する

の2点を考慮し、

「経験したことのないテレインで、オリエンテーリング競技そのものを参加者に楽しんでもらい、運営は、特に手のかかる演出等はしない」というコンセプトで準備を進めていきました。

### 【実行委員会】

今回の実行委員会は、今大会の運営のために初めて組織されました。実行委員は北陸地区在住者だけでなく、関東地区、関西地区在住者までお願いすることになりました。このため、会議、試走会等の開催には、

費用と時間の面で負担が大きいという問題が起きました。幸いにも、実行委員全員が電子メールを利用できる環境にあり、会議等はほとんどメールでリスト上で行え、大会への意識の差、情報の漏れは少なかったのではないかと思います。試走会についても、精度のよい地図が出来上がっていたこともあり、計画通りの負担で行えました。

また、Eカード関係の知識も持っている実行委員が皆無、地図作成をどうするかということも問題でした。これらの問題は、その道のプロにお願いし、経費および作業の低減に寄与したものと思います。

人手の少ない地域でのインカレショート開催にあたり、今後の参考になればと考えています。

### 【申込】

今回の大会では競技クラスにより以下の申込方法を設定しました。

#### 選手権クラス

データを入力した電子データの提出(フロッピー、電子メール)

#### 学生併設クラス

データを入力した電子データの提出(フロッピー、電子メール)

#### 一般併設クラス

郵送受付・電子メール受付・会場受付・クレジットカードによるコンビニ受付

パソコン環境の充実化もあり、選手権クラスおよび学生併設クラスは、実行委員会から事前にエントリーフォームを電子データで各学連代表に配布し、各学連代表より各大学代表へエントリー入力をお願いしました。各大学代表でエントリー入力後は、各学連代表が取りまとめ実行委員会へ提出していただきました。これにより、実行委員会側の作業および入力ミスが低減したものと思います。また、氏名の入力ミスが数件ありましたが、今後も、この方式が継続されるかと思しますので、学生側でチェックのほうはお願いしたいと思います。

一般併設クラスについては、郵送(89:31%)電子メール(142:49%)会場(6:2%)クレジットカード(53:18%)と、電子メールを利用した申込が半

数を占めています。また、今大会で初めて採用された、コンビニクレジット決済申込については web 上のみに周知していなかったにもかかわらず、申込の 2 割弱を占めています。働く社会人としては、手軽さ、時間制約のなさの利便性が助かったのでしょうか。今後、クレジット申込方法が期待できるものと思います。

#### 【広報】

今大会では、テレインの魅力に参加者に伝えるため、要項 1 にサンプルマップの公開を行いました。2cm 四方の小さな地図でしたが、加賀海岸の特徴を良く現していた部分かと思えます。今まで見たことのない地図表記がしてあり、興味を引かれた参加者もいたのではと思います。

要項 2 においては、要項 2 だけの情報で、大会当日に来場できるよう、周辺地図を掲載し、観戦だけに来られる方の、利便を考慮したつもりです。

要項 3 (大会プログラム) では、大会参加者の流れに沿い、判り易いように、図を利用し表記する形をとりました。配布については、学生は大学ごと、一般併設は参加者ごとに郵送で配布しました。プログラム未着、到着の遅れによる問い合わせはなかったことを報告します。

プログラム配布にあたり、チームオフィシャルの ID カードを事前に同封しました。これは、実行委員会の当

日の仕事を減らすことを目的としています。ID カード誤配を心配しましたが、誤配はなかったものと報告します。今後も、継続してみてもどうかと思います。

#### 【資材】

今回も 3 月のインカレ (愛知インカレ) より引継いだ資材を活用し、資材費用を低減することができました。さらに、緑丘小学校、石川県 OL 協会および RMO サービスからも資材の協力を得ることができました。今後も、インカレショート of 会計規模等から考えると、インカレ、地元団体および地域クラブ等からの借用は、必要ではないかと思えます。

愛知インカレ (2001 年) からの引継ぎ資材は、矢板インカレ (2002 年) へ引継いでいます。

#### 【演出】

役員を少数にするため、人手のかかるイベントボードは、選手権決勝のみにし、選手権予選速報や、実況中継は、耳からの情報を重視し、演出を計画しました。

クラシカルやリレーと違い、めまぐるしく順位が変わるショートでは、目からの情報であるイベントボードをしていたのでは、順位の変動がリアルタイムに、緊張感を保ちながら参加者に伝わらないということも理由の一つです。

また、運営参加者も仕事をしながら、

状況が把握できるというのも理由にあります。せっかく運営しているのだから、誰が優勝したとかはやはり、気になるとことです。

今回は、優秀なスピーカーの協力を得ることができ、参加者および運営役員には、リアルタイムに実況を楽しんでいただけたのではないかなと思います。

#### 【今後のテレイン利用について】

加賀海岸は、1 年を通してオリエンテーリングを楽しめるテレインです。ただし、国有林ですので、今後、今回のテレインを合宿および大会開催等で利用したい場合は、石川森林管理署の許可が必要となります。石川県 OL 協会が窓口として相談に乗りましますので、ご一報ください。

#### 【最後に】

2001 年度インカレショートは、いかがでしたでしょうか？経験したことのないテレインで存分に楽しんでいただけたでしょうか？今回の大会が、参加者および運営者の心に残るものであればうれしい限りです。

大会は、成功したものと考えております。これも、参加者、運営者および地域の方のご協力、ご理解があってこそだと思います。この場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。

## 競技責任者報告

山岸甚太郎

私はインカレショート of 競技部門を担当し、主にコースセットについて関わりました。

今回のテレイン「加賀海岸」は人の手で作られた砂防林であり、通称「ワッフル」と言われている網の目のような複雑な地形は、砂防林を作った結果できたものです。このようなテレインは日本にはあまり存在せず、参加者の大部分がはじめてみる地形であったと思います。よって、このテレインの情報をできるだけ公開することが必要だと感じました。

大会前日のモデルイベントで公開した範囲はこのテレインの特徴を大きく含んだ部分であります。また、このテレインの複雑な地形を生み出

した歴史が描かれていた展示館を開放し、選手にいち早くテレインを理解してもらうよう努めました。このテレインを理解していただければ、この人工で作った砂防林は地形が整然としていることがわかり、一見複雑な地形が、実はたどることが可能であり、うまく使えば自分の現在地を特定する材料になります。

このテレインの地形の特徴として、大きく 2 つに分けることができます。地図の北東部分の範囲は、小尾根がくもの巣のようにいるんところに張り出しており、概して植生は良好になっています。もう一つの中央部分から南西部分にかけての範囲は、海岸線と平行、垂直に小尾根が伸びており、一部植生が悪いところも存

在しますが、地形をたどっていくことが容易になっています。

コースについてですが、テレインの植生がおおむね良好であること、地形が緩やかであることから、スピードレースになってしまうことが明らかであったので、コース距離は長めに設定しました。

予選は道走りを多用したルートになっています。予選の範囲は比較的植生の厳しい所を使用したのですが、上手に道を使って、ポイントからしっかりアタックする基本的な技術を要求したコースが多くなっています。

決勝前半はテクニカルなレグが多く、後半は地形を生かして高速ナ

ピゲーションをすることのできる部分がはいた、巡航速度の速いレッグで構成されています。その理由として、前半は地形が複雑であること、後半は地形が単調であり、たどっていくことでスピードを上げることができるためです。また、ウィニングタイムは、男女とも20~22分ぐらいになると予想していました。前半の範囲が難しいわりにコース距離が長く感じたところもありましたが、予選等で地形に慣れた選手が、決勝の後半のレッグでスピードを上げることができたのではないかと思います。決勝は男女とも、ワッフルの地形を生かしたテクニカルなレッグとダイナミックなレッグを織り交ぜた楽しいコースに仕上がったように思います。みなさんはどう感じましたでしょうか？

競技部門での運営ですが、全体として、運営上余裕の持った競技方式であったと思います。今回はパンチングフィニッシュであったため、選手権予選は効果的な演出をすることが

できましたし、Bファイナルは成績確定の負担が少なくなりました。また、パンチングフィニッシュのために、ゴール付近に人が固まり混乱する恐れもありましたが、大きな問題はありませんでした。選手一人一人がパンチングフィニッシュをスムーズにして終わる、つまりパンチングフィニッシュを理解しているならば（今回は大部分の選手がスムーズにしていたのでうまくいったのだと思います）今後この方式を採用しても問題にはならないと思います。

Bファイナルは今回運営と競技の高いレベルでの両立を目指して一斉スタート方式を採用しました。男女各レーンのトップゴールがそのまま優勝者になるという、結果がわかりやすい方式としました。コースパターンは男女とも2×2の4パターンで行い、ほとんどタイムの変わらないルートにしています。ゴール付近は程よくばらついていましたし、大きな混乱もなかったようなのでこの方式はよかったように思えます。ま

た、大きく遅れて帰ってくるような選手も多く見られず、時間的な余裕の持った方式であったと思われます。競技方式については、要所は押さえておくが、運営者にとって負担の少ない形をもっと考えていくべきではないかと思います。

最後に、これから運営に携わるかもしれない方々がこの文章を読まれると思いますが、オリエンテーリングの準備に自分が関わっているということは面白い経験です。地図ができあがり、試走を行う時の興奮は運営者でしか味わえません。どんどん技術が進んでいるオリエンテーリングの運営の設備には驚かされます。参加者をうまく導いてゆく様子は運営しているという実感を持たせてくれます。

私は今回のようなテレインで運営したという貴重な経験に満足しています。そして、この大会を成功に導いてくださった数々の方々に感謝します。

## 大会コントローラ報告

吉村年史

今回のインカレショートの特筆すべき点は、春のインカレを含めて、インカレ史上初めて北陸地方で開催されたということであろう。そのため、実行委員の大半はインカレ運営の経験がなく、大会運営はかなり大変であったと思う。また、インカレ運営経験者が少ないのにもかかわらず、実行委員が40人弱という、少人数で大会運営を行ったという点は評価できる点である。

今回のテレインは砂防林であり、フラットで走行可能度も非常によく、インカレショートにはふさわしいものであった。さらに大会前日が祝日ということもあり、モデルイベントとして、砂防林の一部を開放し、トレーニングの環境を用意した。このモデルイベントは、参加選手にとって未知のテレインを事前に経験することができ、有意義なものとなったに違いない。また、特異なテレインということで、調査・作図に海外プロマッパーを投入したことにより、

完成度の高い地図が出来上がった。そのため、コース設定に制約を与えることなく、予選および決勝ともにインカレショートにふさわしい最高のコースが出来上がった。また、毎年のように実行委員会を悩ませているBファイナルについては、テレインを最大限に活用した趣向を凝らしたコースが提供できたと思う。

演出では、選手権決勝において、最先端の技術を駆使することにより、ゴールした選手のタイムを即座に放送し、リアルタイムに順位が更新されていった。これは、選手、観客ともに、非常に良かったのではないだろうか。来年以降もこの形式が継続されることを切望する。

今後のインカレビジョンを考えたとき、インカレショートを少人数で運営できる体制にしていかなければ、近いうちにインカレショートの存続が危ぶまれていくことになるかもしれない。そのため、実行委員会にと

って必要以上に労力を要する作業は減らしていかなければならない。選手権の学連配分枠の返上による再エントリー作業というのは、実行委員会には非常に負担となる作業である。この問題は毎年のように発生しており、早急に解決しなければならない。これは、選手権の競技者数が男子180人、女子120人と多いためであると考える。現在、春のインカレ(クラシック)では、選手権の競技者数を削減する動きがあるのと同様に、インカレショートにおいても選手権の競技者数の削減について考えても良い時期に来ていると思う。

最後になりましたが、大会コントローラとして、私自身の力不足や九州在住という遠隔地からの任務ということもあり、細部にまでチェックすることはできなかったが、実行委員会をはじめとする関係各位の協力により無事に大会を終えたことに感謝したい。

## 2001 年度インカレショート役員名簿

大会会長 河合利幸（日本学生オリエンテーリング連盟会長）  
裁定委員 上田泰正 上村雅俊 井上アヤ乃  
コントローラー 吉村年史  
コントローラー補佐 土屋周史

実行委員長 木村佳司  
副実行委員長/運営責任者 小林力  
競技責任者/コースプランナー 山岸甚太郎  
会計/渉外/資材/役員人事/エントリー 小林力  
広報担当 木村佳司

当日役員名簿 ...チーフ

モデルイベント	足立良富	山口敏夫	関戸博孝	荒川優子	小林大祐	小川智之	園山哲生	田中香織
本部	木村佳司	山岸甚太郎	小林 力					
受付販売救護	田中香織	荒川優子	古谷智美					
スタート	奥村智憲	小野田敦	二宮聖生	伊藤彰	足立真俊	川崎邦弘	吉川泰亮	小林悟
選手権ゴール	羽鳥和重	山口敏夫	関戸博孝	高井祥恵	小林知洋			
	野中順史	足立良富	橋本敏行	小川智之	村本正道			
併設ゴール	森田剛史	大嶋章寛	岩田和己	鳥居貴浩	園山哲生			
演出	木俣順	藤井範久	松澤俊行	塩田美佐	大西淳一			
バス輸送	小林大祐	奥村理也	頼成祐介					
パトロール	村越真	中村正子	金子恵美	高橋善徳	安井真人			
協力		石川県オリエンテーリング協会						

地図作成 ペローラ・オルソン（SWE） 山川克則（RMO サービス） 高島和宏 木村佳司 小林力

## 将来への提言

実行委員長 木村佳司

### なんのために学生選手権を 開催するの？

これから学生選手権を開催する当  
事者は、「なんのために学生選手権を開  
催するのか？」という素朴な疑問に  
対する自分なりの一応の答えを持っ  
ておくことが必要だと思います。物  
事の決定は常にこの価値基準に照ら  
し合わせて行われるからです。学生  
選手権に関わる人すべての中で価値  
基準はさまざまですが、少なく  
とも実行委員長とその周囲のコアに  
なるメンバーくらいは意識がある程

度共有しておいたほうが良いでしょ  
う。

「なんのために学生選手権を開催  
するのか？」

「学生日本一を決定するため？」

「なぜ学生日本一を決定するの？」

### 変わらなきや。

インカレショート大会は元々肥大  
化した春のインカレに対して、身軽  
で運営自由度の高い学生選手権大会  
として、1993年にスタートしました。  
この10年の間に学生オリエンテーリ

ングの世界も変化していきました。

毎回、実行委員会メンバーと開催場  
所が変更される学生選手権大会。環  
境は常に変化します。毎年同じ環境  
など無いはずなのです。

当然、運営形態もコンセプトも多少  
の振れ幅があるでしょう。しかし、  
学生選手権としての基準をクリアし  
た上で、大胆な提案をしてゆけるよ  
うなインカレショート大会であって  
欲しいと思います。アイデアと柔軟  
性を忘れずに。